

「大阿蘇」の「ガ」「ハ」について

丹 保 健 一

〈要旨〉

これまで問題とされてきた「大阿蘇」の「ガ」「ハ」について検討し、次のことを明らかにした。問題となった「ガ」「ハ」に関する非機械的既知・未知論による説明と、判断文・現象文によるそれとは矛盾するものでない。このことは、問題となる10行目、21行目を精密に且つ新しい視点によって分析し、各々の行を詩全体の中に正しく位置付けることによって示し得る。

〈はじめに〉

これまでの研究において、特に問題とされているのは、10行目の「山は煙をあげている」、21行目の「雨が降っている 雨が降っている」の二箇所である。

諸説の検討に入る前に詩全体を挙げておく。

「大阿蘇」

- 雨の中に馬がたっている (1)
一頭二頭子馬をまじえた馬の群れが雨の中にとっている (2)
雨は蕭々と降っている (3)
馬は草を食べている (4)
尻尾も背中も鬣も ぐっしょりと濡れそぼって (5)
かれらは草を食べている (6)
草を食べている (7)
あるものは草も食べずに きょんとしてうなじを垂れてたっている (8)
雨は降っている 蕭々と降っている (9)
山は煙をあげている (10)
中岳の頂から うすら黄いろい 重っ苦しい噴煙が濛々とあがっている (11)
空いちめんの雨雲と (12)
やがてそれははじめもなしにつづいている (13)
馬は草を食べている (14)
艸千里浜のとある丘の (15)
雨に洗われた青草を 彼らはいっしんにたべている (16)

たべている (17)

彼等はそのにみんな静かにたっている (18)

ぐっしょりと雨に濡れて いつまでもひとつところに 彼等は静かにあつまっている (19)

もしも百年がこの一瞬の間にたったとしても 何の不思議もないだろう (20)

雨が降っている 雨が降っている (21)

雨は蕭々と降っている (22)

『国語 二』 光村図書出版^{*(1)}による

<1> 諸説

諸説については、岡崎氏の『『大阿蘇』の『ガ』『ハ』』に詳しい。^{*(2)} ここではごく簡単に融れるに留める。

(1) 山は煙をあげている(10)について

諸説を大別すると

- ①「山」は未知なので「山は」とするのは誤りである。
- ②「山」は、表題の「大阿蘇」を受け、既知であり問題はない。
- ③既知、未知にこだわらない。判断文・現象文の観点から説明出来る。

となろう。

①の説は、この詩を読んで不自然だとする者が殆んどないことから問題にならない。②の説は可能性を秘めているものと言えよう。③の説は、判断文・現象文の観点から説明しようとするものであるが既知・未知論を機械的に考えているものも見られ問題は残る。

(2) 雨が降っている 雨が降っている(21)について

諸説は、

- ①既知、未知（旧情報、新情報）による説明。
- ②現象文、判断文による説明。

に大別される。

①の説にも、既知、未知を機械的に考えない見方があり、単純に排除すべきものではない。②の説を、その中でも永野賢氏（『国語教師の条件』）の考え方を岡崎氏は取るのであるが、その説明には疑問が残る。現象文Aガ～スル。において、Aすなわち「雨」に重きがあるとすると疑問が残る。ここでは、「雨が降っている」全体に、岡崎氏の言葉を借りれば「重み」があるとしてはいけないのだろうか。勿論、転位的判断文と考えれば別である。だがそう考えるべきではないことは、詩全体の構造との係わりを見れば明らかであろう。詩全体の構造については、次節で述べる。

〈2〉 「大阿蘇」の構造

この詩は、「雨の中に馬がたっている」(1)から始まる。降ると言う動きを連想させる「雨」の中に、走ると言う動き、躍動を連想させる「馬」がたっていることから始まる。

しかし、

「一頭二頭子馬をまじえた馬の群れが雨の中にとっている」(2)とあるように、「馬」は「立っている」馬である。さらに、「馬」は「群れ」の中にいる馬である。「子馬をまじえた」群れである。はぐれ馬でない。やすらぎを感じさせる馬達である。

そして又、「雨」は、「雨は蕭々と降っている」(3)とあるように、「蕭々と」降る雨である。間断のない「雨」である。動きのあるものとしてより、辺り一面を覆うものとして在り続ける「雨」である。

「馬は草を食べている」(4)で、「馬」の動きが入る。この動きは、「かれらは草を食べている」(6)「草を食べている」(7)と繰返され、次第に一つの状態となる。「馬は草を食べている」(4)においてもそれは繰返され、変化のない状態の継続がある。

「尻尾も背中も鬣も ぐっしょりと濡れそぼって」(5)に時の経過を見る。

「雨は降っている 蕭々と降っている」(9)と、3行目の「雨は蕭々と降っている」(3)は繰返され、状況に変化を伴わない時の経過を知る。時は次第に失われていく。

雨の降る情景は、21、22行においても「雨が降っている 雨が降っている」(21)「雨は蕭々と降っている」(22)、と見られるがこの二行については後に触れる。

「山は煙をあげている」(10)で動きが入る。しかし、それは「中岳の頂から うすら黄いろい 重っ苦しい噴煙が濛々とあがっている」(11)とあるように、「重っ苦しい」噴煙であって華やかな動きを持つものではない。煙は「空いちめんの雨雲と」(12)「やがてそれははじめもなしにつづいている」(13)。つまり、「はじめもなしにつづいている」世界、天空の雨雲と連なり融合する、動きのない世界に入っていく。動から静に入っていく。

「馬は草を食べている」(14)で視点は「馬」に戻る。馬は依然として「草を食べている」。ここにも動きのない時の経過がある。

「艸千里浜のとある丘の」(15)の「艸千里浜」に、草が一面に広がり、地平線となって天空の雨雲と融合している情景が想起される。

「雨に洗われた青草を 彼らはいっしんにたべている」(16)；この詩における唯一の有情物である馬は、我を忘れた世界にいる。「たべている」(17)でそれは繰返され、さらに深まる。

「彼等はそこにみんな静かにたっている」(18)には、言葉としての「静かに」が入る。それは何の抵抗もなしに受け入れられる。「静か」にたっているのは一頭だけではない。総ての「馬」の内面までの「静か」さと、辺りの「静寂さ」は更に確かなものとなる。

「ぐっしょりと雨に濡れて いつまでもひとつところに 彼等は静かにあつまっている」(19)；「いつまでも」「静かに」「あつまっている」とここでの情景がはっきりと示される。動きのない世界である。時間の流れを忘れさせる世界である。

そして、この詩における唯一の直接的な心情吐露である「もしも百年がこの一瞬間にたつたとしても 何の不思議もないだろう」(22)と続く。視点は、もはや情景から離れ、「悠久」の「観念」の世界に入っていく。

はっと気がつくと、眼前に「雨が降っている」。さらに「雨が降っている」と繰り返され、

再び「悠久」の世界へと向かう。

そして、「雨は蕭々と降っている」(22)と「悠久」の時間を超越した世界に戻って行く。^{註(3)}

〈3〉 問題となる「ガ」「ハ」

(1) 「山は煙をあげている」(10)について

「山は煙をあげている」(10)の「山は」は主文における主題表示である。「は」を「が」としても文としては不自然ではない。「山が煙をあげている」自体は不自然でない。

「山が煙をあげている」は、可能性としては、転位的判断文、或いは、現象文がある。しかし、この詩の流れの中では「何が煙をあげているか」の答えとはなり得ない。転位的判断文でないことは言うまでもない。では現象文と仮に考えるとどうだろうか。この場合も、文それ自体としては不自然ではない。可能性としてはあり得る。詩全体の構造から見ていく必要があろう。

〈2〉の『「大阿蘇」の構造』で見たように4行目から8行目にかけては動から静への移行がある。そして、9行目において、「雨は蕭々と降っている」(9)と3行目がそのまま繰返され、さらにそれは深まる。

10行目において「煙をあげている」という動きが入る。「煙をあげている」という動きだけでは、唐突という感じはない。しかし、「山が煙をあげている」となると、突然目の前に現れた「山」が、「煙をあげている」という動きを伴って入って来ることになる。この詩の流れの中では唐突と言う感が免がれない。しかも、「山が煙をあげている」の次行に「中岳の頂からうすら黄いろい 重っ苦しい噴煙が濛々とあがっている」(11)と、今度は、「噴煙が」眼前に現れる。このような現れかたは、「山が煙をあげている」と同様に、いやそれと相俟ってさらに唐突である。「山は」とすると「中岳の頂から うすら黄いろい 重っ苦しい噴煙が濛々とあがっている」(11)は、一転して唐突さがなくなる。それは、「山は」とすることで「山」を背景としてとらえているからである。それを背景としての動きである。「山」について述べている中での「噴煙」の動きなのである。

「山は煙をあげている」(10)の検討に移ろう。「山は煙をあげている」は、それ自身としては、所謂典型的判断文又は対比的判断文と解され得るものである。しかし、このばあい、対比的判断文とすると、雨と山を対比して、つまり分断して促えることになる。その為、総てが「悠久」の中に合一している有様を描くには適当ではない。又、そのこと以上に、「雨は降っている」と「山は煙をあげている」とが対比的なものとして受け入れられるものか疑問である。

一方、典型的判断文と考えると、山はすでに判断の対象たるものでなければならぬ。このため初出の「山」に「は」を使用するのは誤りであるとする説、或いは、「山」は「大阿蘇」を受けていると言った説が出ることになる。

初出のものを「は」で受けることは即誤りである、と言えないことは、「山は」のままでこの詩が不自然でないことから明らかである。「山は」のままであっても、既知・未知説の代表者とも言える大野晋氏の述べる所ともなら矛盾しない。このような「は」の用法のあることは、大野氏自身十分承知していることなのである。むしろ、問題は、この「は」を表題の「大阿蘇」と結び付けるか否かである。いずれがこの詩の場合、より適切な表現であるかである。詩の内容に係わる問題である。

この詩の場合、表題と「山は」を直接的に結びつけなくても詩として成立する。小説の冒頭などで初出ものが「は」を受けることはすでに指摘のあるところである。しかし、その場合でも自然なものとして、抵抗のないものとして受け入れられるものでなければならない。この詩の場合、「山は」の受け入れを自然にしているのは、この詩の情景であり、視野の広さであろう。「馬の群れが草を食べている」といった情景と、それを遠くから見ているということからくる視野の広さである。このような情景と視野があれば、「山」を受け入れることは抵抗のあるものではない。受け入れられた「山」は、すでに在ったものとして促えられる。更に言えば、「大阿蘇」以前から存するものとして受け入れられるのである。「雨」「馬」「噴煙」と、動きをその性質として持つものの中であって唯一つ「山」のみが動かざるものとして、しかし、「噴煙をあげている」動きを一方では伴いながら、源初から、時間を超越したものとして登場するのである。

「山は煙をあげている」(10)は判断文である。そして、又、同時に非機械的既知・未知論で言う既知と考えることもできる。この場合の既知とは、既出のものと言う意味でないことは言うまでもない。題目として受け入れることのできるもの、対象化できるもの、初出のものであっても既に在ったものとして受け入れることのできるものと言った意味である。^{※(4)}

勿論、表題「大阿蘇」と結び付ける説も可能性としては残る。この表題「大阿蘇」の「大」「に」注目すれば、それはより可能性を帯びてくる。しかし、表題「大阿蘇」と直接的に結びつけなくてもこの詩は成立する。

(2) 「雨が降っている 雨が降っている」(21)について

21行目を、「雨は降っている 雨は降っている」とすべきだとする機械的既知・未知論はさすがにない。しかし、「雨が降っている 雨が降っている」(21)の解釈には大別して二通りのものが見られる。詩の流れを、詩の構造を考えねばならない。そのことによってここでの「が」の意味が明らかになろう。

大野氏はこの部分を、「その悠久の思いから忽焉と我にかえったとき、感動をこめて、『雨が降っている 雨が降っている』と、ありのままに目の前の状況の動きを描写し、」(『日本語の文法を考える』50P)と述べている。このことと「現象文」であるとする考え方は矛盾しない。むしろ、現象文である「雨が降っている」を、永野氏や岡崎氏のように「雨」に重みがあると決めつけてしまうことに問題がある。川本氏の言うように、「『雨が降っている』という自体が一丸となって前面に浮かぶ」(『『が』と『は』との対比』)でよいのではなかろうか。この時点(21行目)において、どこかに重点を置く表現、つまり、思考の過程を感じさせる表現は相応しくない。ここは、大野氏が、また川本氏が言うように「悠久の思いから忽焉と我にかえった時、『雨が降っている』という自体が一丸となって前面に浮かぶ。」、それを思考過程を経ずに表現したのが「雨が降っている 雨が降っている」(21)の最初の「雨が降っている」なのである。これこそ、三尾砂氏のいう「現象文」、すなわち「判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつつたままを、そのまま表現した文」^{※(5)}である。

そして、外へ目が向けられる。21行の中で「雨が降っている」と繰返される。その情景はすでに外から入ってくる情景ではなく、目が向けられる情景である。意識のややなる回復とも言うべき変化がある。そこに見られる情景は、やはり、以前と変わらざる情景「雨が降

っている」である。それに気付き、それが意識される時、却ってそのことによって再び「悠久」へと導びかれるのである。ここに、「雨が降っている 雨が降っている」と繰返される表現の意味を見ることができる。この繰返しがあって、次行の「雨は蕭々と降っている」(2)にスムーズに移っていくことができる。

ここでも、未知のものを受けているとすることと、現象文であることとは矛盾しない。未知といっても機械的既知・未知論で言う未知でないことは言うまでもない。

—1985.10.15—

(注)

- (1) 『国語 二』光村図書出版 昭和56年2月発行による。本文は、全集などによるべきであろうが、本稿では表記については触れないので教科書によった。教科書によったのは、言語教育と文学教育とを分離しない教材研究の必要性を感じているからでもある。
- (2) 岡崎 晃一 1981 には、安良岡 康作 大野 晋 川本 茂雄 永野 賢 清水 満 阿部 正博 竹岡 正夫 等の各氏の説を取上げているが、本稿でそれらの一つ一つに言及することは却って煩雑になろう。
- (3) 以上のような促えかたに近いものを二、三挙げておこう。
「眼前に芒漠とひろがっている大自然の悠久感の中では百年ぐらの時間はもののかずではない、おそらく百年たったのちでも馬は今のままの姿勢で、雨に濡れながら黙々と草を食べているにちがいないという、時間的観念も消え失せてしまいそうな大自然の茫漠感と静寂感へと続いているのである。」(飛高 隆夫 1961「三好 達治」の項執筆 吉田 分銅編『近代詩観賞辞典』)
「このように、多様なもの、異質なものが秩序づけられ、調和・統一された一体感『それは天・地・人のひとつとなる姿でもある』が、一瞬にして永遠なるものとして結晶しているのが、この詩の世界の美の構造といえましょう。」(西郷 竹彦 1978) 西郷氏の分析は、「山」に対する解釈を除けば最も共鳴できるものである。
- (4) 既知・未知による使い分けがなされる構文上の条件については、拙稿(丹保 1985)を参照されたい。また、具体例が豊富に挙げられている野田 1985 も重宝である。
- (5) 三尾 砂 1948.2.20『国語法文章論』83P

(参考文献)

- 三尾 砂 1948.2.20 『国語法文章論』
 川本 茂雄 1975.11.20 『『が』と『は』との対比』(『季刊文芸教育』No.16)
 永野 賢 1976.2.1 「国語教師の条件」(『言語生活』No.298)
 西郷 竹彦 1978.1 「(1)異質なものの統一——三好 達治『大阿蘇』——」
 (『西郷 竹彦 文芸教育著作集 5 美の理論 美の教育』)
 大野 晋 1978.7.20 『日本語の文法を考える』
 岡崎 晃一 1981.11.10 「大阿蘇(三好 達治)の『が』と『は』」
 (『島田 勇雄 古稀記念ことばの論集』)
 寺村 秀夫 編 野田 尚史 1985.4.20 『日本語文法マスターシリーズ 1 はとが』
 丹保 健一 1985.3.25 『『ガ』と『ハ』の使い分け——新・旧情報をめぐって——』
 (『金沢大学語学文学研究』第14集)